

「神さまの夢」

開会聖句 コリント人への手紙Ⅰ 1 章 27～28 節

「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。…この世の取るに足りない者や、見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」

はじめに

お正月はとうに過ぎたのですが、皆さんは今年の夢や目標を考えられましたか。今更、この年でそんなのないよという人もいれば、いや、今年こそはと思っておられる人もいるでしょう。今日は一年の初めにふさわしく、「神さまの夢」について語りたいと思います。

63 年前に、20 万の聴衆の前で、「I have a dream」と言った牧師がいました。キング牧師です。彼はリンカーン大統領の「奴隷解放宣言」百年の記念の集会で、この演説をしました。「あれから百年たったが、まだまだ黒人差別はなくなっていない。でもいつか、黒人と白人が共に手を取り合って生きる時代がやってくる。私にはその夢がある。」という内容で、今も多くの人の心に残っています。

神さまも夢を持っておられます。聖書にはそれが書かれていて、皆さんもその夢と無関係ではありません。一枚噛んでいます。このことばは、良くないたくらみに加わっているときに、使われることが多いですが、元々は歌舞伎から生まれたことばで、この「一枚」とは看板のこと。「一枚噛む」とは、看板が一枚加わる、役者としてその芝居に出演するという意味です。つまり、私たちは救われたときから、神さまの夢に一枚噛んでいるのです。年の始めに、そんなスケールの大きな夢のことを考えてみましょう。主題は「神さまの夢」です。

本論

Ⅰ. 神の夢とはーキリストにあって 1 つにされること

神さまの夢って何？バベルの話を振り返ります。人間が 1 つのことばで話していた頃、彼らは自分たちの技術の発明に高ぶってしまい、神無しでも大丈夫、自分たちで力を合わせたら大丈夫だと考え始めました。そんな考えに危険を感じた神さまは、1 つだったことばを乱し、彼らが全く通じないバラバラのことばを話すようにされました。それで、工事は中断され、ノアの子、3 人の子孫が地の全面に散らされていきました。バベルの話は、洪水の後、人間というものは全く変わらず、やっぱり悪を繰り返していったことと、一方で「生めよ、増えよ、地に満ちよ」という神の人間への祝福が実現していったことを表わしています。

それから、もう一つ「集められた」話もしました。これは新約の時代のことで、ペンテコス

テの日に、聖霊が天から注がれて、キリストを信じる人たちが 1 つに集められたことでした。そのキリストまでの長い系図の最初の部分が、10 節のセムから 10 代の系図と、少し前 5 章のアダムからノアまで 10 代の系図を合わせた 20 代にわたる系図になります。主の名を呼ぶことを始めた (4:26) 人たちの系図です。セムの系図の 10 代目はアブラハムです。このアブラハムが、イスラエルの先祖ですね。ちなみに、マタイの系図はこのアブラハムから、ルカの系図はアダムから書かれています。私たちにとっては退屈で、気の遠くなるような古い歴史ですが、この系図が進むことで、神さまの夢は少しずつ実現に近づきます。では、神さまの夢って何なのでしょう？ 散らされた人々がキリストにあって 1 つにされることです。

色々な民族が神さまを礼拝するために集まってくるということは、旧約 (詩篇、預言書) でも語られていますが、その夢と実現の計画を知らされ、心動かされたのがパウロでした。エペソ 1:9「…その奥義とは…一切のものが、キリストにあって 1 つに集められることです。」彼が教会を次々立てていったのは、その神さまの夢のためです。最初に話しましたリンカーンの奴隷解放宣言も、キング牧師の夢も、私はその延長上にあることだと思います。夢は厳しい現実の中で見るものでしょう。パウロの後をついで教会を励ました使徒ヨハネは、激しい迫害の中で、夢の実現を幻の中で見せてもらい、神さまの励ましを受けました。今、その夢はどうなってるでしょう。今年も色々なニュースが飛びこんできて、逆行しているように見えます。国と国、民族と民族の間には緊張があります。先日、書店の宗教関連のコーナーをのぞきました。スピリチュアルと他宗教の本は結構あるのに、キリスト教の本は指で数えるほどでした。心のよりどころを求める人は多いけれど、キリスト教は求められてないのかと思いました。しかし、それはそれとして、今も昔も神さまの夢は人知れず、進行します。

II. 神の夢はどこからスタートするー子どものいない夫婦から

次に、人知れず進行する神さまの夢の最初はどこからスタートしたのかを見ていきます。27～32 節にはテラの歴史が書かれています。なぜ、こんなに長いのか？ アブラハムの父からでしょう。テラはカルデア人のウルに住んでいて、アブラム、ハラン、ナホルの 3 人の息子がいましたが、ハランが 3 人の子 (ロト、ミルカ、イスカ) を残して早死にします。そして、ナホルはこのミルカと、アブラハムはサラと結婚します。ナホルとミルカの子がアブラハムの子イサクの妻リベカです。テラは残された 2 人の息子の 1 人、アブラムとその妻、孫のロトを伴い、長く暮らしていたウルからカナンの地に向かいますが、途中ハランに定着し、そこで死にます。神の声が無ければ、彼もそのまま留まっていたかもしれません。

このアブラハムに、神さまが声をかけられました。12:1～3「主はアブラハムに言われた。『あなたは、あなたの土地、…わたしが示す地に行きなさい。』…地のすべての部族はあなたによって祝福される。」「地の全ての部族は」という一節は、「キリストにあって 1 つ」という神さまの夢を思わせるものですね。皆さんは、彼にどんなイメージを持っていますか。な

ぜ、アブラハムが選ばれたのでしょう。彼の信仰ですか？ウルはメソポタミア地方の都市です。聖書のバベルの塔は完成しませんでした、それらしきジググラトと呼ばれる塔がいくつもあり、月礼拝が盛んな地でした。だから、テラー族もそれを信じていた可能性はあります。主の御名で祈る人たちの子孫であっても、古代は多神教が普通でした。12:1の「あなたの…を離れて」ということばは、場所だけでなく、そこでの生き方と一切を捨ててということだと思われます。もう一つ、テラー族は経済的理由で新天地を求めて移動していたと考えられています。アブラハムはそこそこ裕福なイメージがありますが、実際は限られた数の家畜を飼育して生業を立てる、当時の社会的弱者だったようです。あくまで推測ですが、しかし、はっきり書かれていることが一つあります。11:30「サライは不妊の女で、彼女には子がいなかった。」神が選ばれたのは、不妊の妻を持つ夫だったことです。

これから、その子孫によって世界を祝福しようとする神さまの夢にはとうていふさわしくない夫婦ですが、これが、神さまの夢のスタートです。聖書には不妊の女性が度々出てきます。今もですが、昔はもっと肩身の狭い人生だったと思います。新約だとバプテスマのヨハネを生んだエリサベツが思いだされます。ルカの受胎告知の場面、1:37「神にとって不可能なことは何もありません。」という御使いの有名なことばがあります。これは、高齢で不妊だったエリサベツの妊娠のことを指していると同時に、これから未婚で子どもを産むという知らせに戸惑っているマリヤに対して言われたことばでもあります。この知らせを持って、マリヤは急いでエリサベツに会いに行き、2人は神をほめたたえました。一部を読みますと、1:46「マリヤは言った、『私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をほめたたえます。この卑しいはしのために目をとめてくださったからです。』」

今日の開会聖句はⅠコリント 1:27～28「しかし神は、…この世の取るに足りない者や、見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」マリヤが言った卑しいはしのためと同じです。今日、私たちは神さまの夢ということを考えてきましたが、それはすべての人がキリストにあって1つに集められること。そして、その計画は、それを担うには、取るに足りない、最もふさわしくない、不妊の夫婦から始められたのでした。

終わりに

私たちもそのような小さく、弱い存在です。けれども、神さまは、不妊の夫婦を選んで、夢の実現を始められたのですから、私たちでも十分に用いていただけたと思います。私たちは、1人1人が、神さまの夢という舞台に看板を連ねている役者です。へばかも、大根かもしれませぬ。でもその舞台に参加できることは、永遠に価値のあることです。目に見える進歩や発展に反して、闇はどんどん深まっている、そんな時代に思えます。しかし、だからこそ、私たちは、神さまに信頼して、この一年も神さまの夢の舞台に立って行きたいと思います